

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	福島宙輝
主論文題目： 味覚の言語的表象： 日本酒の味覚行為と言語の相互作用のメカニズム				
(内容の要旨) <p>本論文では、味覚の表象構成モデルを論じる。本研究の目的は、味わいの多相的な表象構造を現象論的なモデルで示すことにある。モデルは対象と自己という二元論ではなく、現象としての立ち現われの認識を出発点とする。本研究では、味覚の渋った立ち現れを表象に結びつける働きを類推および参照点能力にもとめる。本モデルにおいて（一回の）味覚の表象は、ソースドメインとしてのある視点（パースペクティブ）を立ち現われに投射することによって得られる、その場限りの関係性として捉えられる。したがって一般に自然科学において重視される再現性や客観性とは異なる軸の、主観的かつ、一度限りのかかわりによって生起する像としての表象が、本研究において求められる表象のありかたである。そして一度限りの表象は、複数のパースペクティブをとりつつ重合的に繰り返されることによって、ある銘柄の総体としての理解を内的に形成する。</p> <p>本研究では、パースペクティブを介した、仲だちされた複相的な表象構成を簡便なモデル図によって示したのち、多様な仲だちの各論として、音ドメイン（音象徴）による味わいの言語化及び、描画による味わいの表象化の2種を論じる。</p> <p>音象徴については、味覚表現における音象徴語の使用原理の解明を試みた。本研究では音韻や形式に加え、音象徴語が味覚表現のなかでもどのような語と共起関係にあるかに着目した。共起関係の分析の結果、味覚表現において音象徴語の使用原理として①定量的な表現や状況表現には用いられづらいこと、②比較的上位カテゴリの味わい表現と共起しやすく、具体的な要素とは共起関係が弱いこと、そして③味わいの“状態”よりも“変化”を表現するために用いられる、という三点を明らかにした。本研究では音象徴語の共起関係の分析手法として、「スコープ分析」、 「形式遮蔽法」、音象徴語の抽出システム「FOCCo」を開発した。</p>				

描画表象の研究では、味覚と形の感覚間象徴対応関係(crossmodal correspondence between taste and shape)において従来行われてきた選択式のテストに対して、生成課題を試みた。この研究では、単体の試薬としての味刺激を用いるのではなく、実際の飲食物における呈味を刺激とした。味刺激はそれ単体で存在するものではなく、例えばワインと日本酒では渋味の表象特性は異なる。本研究は日本酒における主要味と副次的刺激味を区別することで、ある味を多様な味の関係性の中で捉える手法を提案した。

キーワード：味覚表象, 多感覚情報, 音象徴, 描画表象, 日本酒